

第4回星野立子賞

『櫻翳』

藺草慶子

紅梅となりて一夜を匂ふべく

叡山やみるみる上がる盆の月

水に浮く椿のまはりはじめたる

鳴きだせば蝸の木のとほざかる

鷹の巢の見えて日当たる巖一つ

恋せよと蝸忘れよと蝸

蠅生まる海風に翅立てなほし

ひといきに消す黒板や初嵐

花影のうへをはなびらさばしれる

いなびかりしづかに亀の浮かび来る

花の翳すべて逢ふべく逢ひし人

願ひごと多きは楽し木の実降る

若き日々あり初蝶を見失ふ

吾もまた誰かの夢か草氷柱

亀鳴くや人に器といへるもの

わが身より狐火の立ちのぼるとは

十人の僧立ち上がる牡丹かな

よろこびは晩年に来よ龍の玉

青嵐や死者ことごとく吾を統ぶ

火の映る胸の釦やクリスマス

早起きの母の引きたる草匂ふ

風花の散りこむ螺鈿尽しの間

ひるがほや永劫は何待つ時間

枯れすすむなり夢違観世音

浮輪ごと母に抱かれてゐたりけり

枯木立光の方へ歩きなさい

昭和十九年六月一日マリアナ諸島にて
祖父小川衛戦没享年三十四

寒卵ひところがり戦争へ

敗戦日なほ海底に艦と祖父

寒紅梅晩年に恋のこしおく

炎抱きかかへ燈籠流しけり